

『大齋院前の御集』に見る齋院の暮らしと歌

The life and wakas seen in “The former wakashu of Ohsaiin”

白鳥 快枝
Yoshie Shirotori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：大齋院，選子内親王，齋院サロン

Key words：Ôsai-in，Princess Senshi，Sai-in salon

1. 研究目的

本研究の目的は、『大齋院前の御集』（以下、『前の御集』と略す）に見られる生活と文学のありようを考えることである。

後に大齋院と称される村上天皇の第10皇女選子内親王（以下、選子と略す）は、12歳で第16代賀茂齋院に卜定され68歳で退下するまで、5代の天皇（円融、花山、一条、三条、後一条）の57年間を齋院として奉仕した。

齋院とは、賀茂神社に奉仕した未婚の内親王または女王のことである。その居所も齋院と呼ばれ、文芸サロンになることもあった。

『前の御集』は、選子20歳から22歳までの約3年間（永観元年〈983〉から寛和元年〈985〉）の暮らしぶりを詠った、齋院サロンを場とした歌集である。

距離的にも心理的にも、都の俗世界から遠ざけられた齋院という聖域において、選子と女房達がいかなる暮らしを営み、どのような文学・文化活動を行っていたのか、和歌がいかなる意味を持っていたのか、『前の御集』から読み取っていく。

2. 研究実施内容

① 方法

先行研究を基に『前の御集』所収の394首の歌を、154の歌群に分け、次のように詠歌の場と契機に分類する。その上で、それぞれの場における選子と女房達の役割と、詠歌について詳細に見る。

【詠歌の場と契機の分類】

- I 選子御前の場・・・・・・・・・・・・ 75群
 ① 選子主導の場・・・・・・・・・・・・ 71群
 ② 選子が独自に出題・・・・・・・・・・・・ 14群
 ③ 選子を付度して女房が出詠・・・・・・・・ 42群

- ④ 里居の女房との贈答・・・・・・・・・・・・ 15群
 ⑤ 女房主導の場・・・・・・・・・・・・ 4群
 ⑥ 女房の様子から選子が出題・・・・・・・・ 4群
 II 選子不在の場・・・・・・・・・・・・ 25群
 ⑦ 女房同士のやり取り・・・・・・・・・・・・ 17群
 ⑧ 齋院で・・・・・・・・・・・・ 6群
 ⑨ 里居する女房と・・・・・・・・・・・・ 11群
 ⑩ 齋院司の職員との交流・・・・・・・・・・・・ 8群
 III 選子不在の場から選子御前へ・・・・・・・・ 5群
 IV 外部の人との交流・・・・・・・・・・・・ 20群
 V 選子御前であるか不明の場・・・・・・・・ 29群

② 詠歌の場の考察と結果

【②選子が独自に出題の場】

二十日ばかりの月、雲薄らかにかかりける、梅の木の間より漏りたるが、いとをかききを、^o御覧じて

260 木の間分け漏りたる月の影見てぞ来るも過ぐるも秋は知らるる

宰相

261 過ぐる秋はそのみやきのの木の間より漏る月影の誘ふなりけり

262 嘆くとも木の間月のなかりせば秋に心を尽くさましやは

*本文、歌番号は『新編国歌大観』による

下線①より、260番歌は選子の歌だとわかる。

秋の夜、月見をしながら選子は『古今集』の歌「木の間より漏りくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり（184）」を想起し歌を詠み、女房達に題を示す。即座に主人の意図を理解した上臈女房の宰相が、「過ぐる秋もわかるのですね」と「相槌の歌」を詠む。続けてもう1首、古今集歌から「心

づくし」の部分を取上げ、より情緒的な歌を詠む。下線部のように、選子の歌で使われた歌語を、宰相も自分の歌に詠み入れることで、主従が相和して文芸サロンの雰囲気を作り出している。

このように、全ての場を考察した結果は、以下の通りである。

- (1) 詠歌の基本的なパターンは「その場の状況把握→『古今集』等の歌の想起→出詠」である。
- (2) 歌材はほとんどが景物であるが、選子不在の場、選子御前であるか不明の場では、女房同士の諍い、蔵人の足音、殿上人の噂話等、風変わりな題材で歌が詠まれることがある。
- (3) 齋院サロンでは選子が指導的役割を果たしており、宰相、進、馬の3人の女房達が選子の意向を汲み、詠歌の場で活躍している。
- (4) 里居の女房とは、物の贈答の際に、歌も詠み交わす。選子が直接歌の贈答をすることはないが、意向を受けた宰相、進等の女房が代理で歌を詠む。女房間では、気心の知れた者同士の、軽口の応酬となることもある。
- (5) 齋院司の職員とは、女房の一人が齋院を代表して歌の贈答をする。この場合女房の名前は記されない。
- (6) 外部の人々とは、近い親戚に限り選子が直に歌の贈答をする。その他の人々に対しては、当意即妙に歌が詠める女房達が対応している。

③『前の御集』の性格

- i 私家集に分類されるが、選子個人の家集ではなく、選子と女房達が核となる齋院サロンの歌集である。
- ii 四季別の編纂方法が採用され、上巻に春夏の歌を、下巻に秋冬の歌を配そうとした意図が見えるが、現存の写本は錯簡や本文の乱れがある。本研究では、原態は上下巻が同量になるよう編集された歌集である可能性を指摘した。
- iii 歌材、歌語、詠歌の基本的なパターンから、『古今集』を踏襲していることを確認した。
- iv 齋院サロンは、隔絶された聖域内にあるという特殊性と、後宮や内親王家サロンとの類似性の両方を合わせ持ち、それが『前の御集』の性格にもなっている。
- v 『前の御集』所収の歌の大部分は、詞書とセットではじめて理解可能になる「褻の歌」である。

3. まとめと今後の課題

この時代、選子と女房達は、齋院の生活が57年もの長期に及ぶとは考えていなかった。『前の御集』成立の背景には、暮らしの隅々までを歌によって残したいと願う、選子の意向があったと考える。通常の歌集には見られない、風変わりな題材の歌が書き留められたのもそのためであろう。歌は選子と女房達にとって、あるときは喜びであり、慰めであり、祈りであり、日常のおしゃれな会話であり、生活のあらゆる場面を記録することができる道具でもあった。「写真」を撮るように歌を詠み、「卒業アルバム」のように歌集に仕立てたのではないかと考える。齋院退下後の心の支えとして、手元に置くためである。齋院から去っていく女房達にも渡していたのであろう。『前の御集』は、当初はあくまでも、選子とサロンの人々のために作られたものとする。

その後、対外的に齋院の存在感を示す必要に迫られ、いつ頃、どのような経緯で流布されたかについては、これからの課題としたい。

今後は、選子の齋院サロンの周辺の文学と、歴史学にも気を配りつつ、本研究で十分に考察出来なかった、村上朝から一条朝への文学活動の推移も調べたい。その後『大齋院御集』の研究に進みたいと思う。また、歌の修辞と歌語の理解にも努める所存である。

主要参考文献

- [1] 秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二「大齋院前の御集の研究-いはゆる馬内侍歌日記-」(『日本大学創立七十年記念論文集 第一巻 人文科学編』1960年)
- [2] 『日本大学本大齋院前の御集』(日本大学図書館編, 1962年)
- [3] 石井文夫・杉谷寿郎『大齋院前の御集注釈』(私家集注釈叢刊12, 貴重本刊行会, 2002年9月)
- [4] 天野紀代子・園明美・山崎和子『大齋院前の御集全釈』(私家集全釈叢書37, 風間書房, 2009年5月)
- [5] 所京子『齋王研究の史的展開 伊勢齋宮と賀茂齋院の世界』(勉誠出版, 2017年1月)

